

産学連携実績紹介フォーム

1. 講座の計画から実施までの情報

教育機関名 (学校名・学部学科等)	横浜国立大学 (全学部、全学年対象)	実施時期	2014年度 春学期(前期)
対象学年・学期・人数	全学年対象・春学期(前期)・70名		
講座名	システム・エンジニアリング(選択科目、教養教育科目)		
連携企業・団体	一般社団法人 神奈川県情報サービス産業協会		
支援・連携の種類	連携団体の作成テキストとハンドブックにより講座を実施(講師派遣型)		
講座の概要・特徴	<p>SEの仕事について講師の経験を踏まえて解説し、理系・文系さらには男女を問わず、IT業界を進路選択の一つとして視野に捉えて考察する場を提供する。</p> <p>講義は、協会で編纂した手引き書(SEハンドブック)を元に、担当講師が独自に作成した教材を使った授業でSEの仕事に理解を深め、さらに講師自身の経験に基づく業界の話を受講生に紹介することで、業界の現状を正しく伝える。</p>		
産学連携検討の背景	IT普及による技術者の人材需要の高まりと、大学側が感じる実践的な教育分野充実の必要性、学生が持つ時節的な就職難への危機意識、実践的、具体的な内容の方が理解しやすいという志向を背景に、企業、大学、学生の意識が一致している。		
連携の狙い、目的・目標	専門科目の授業内容が、実社会で稼働する技術に結びつけ易くなって、専門科目の理解、興味が深まることが期待される。また、産業的にも大きな範囲を占める「システム・エンジニアリング」、「システム・エンジニア」という業種がより広く理解されることを目指す。		
連携にあたっての課題・懸念	大学の授業として、一つの学問体系とした進行、授業構成が要求される。回ごとに講師が異なるため、連携を円滑にするコーディネータ役、質問やディスカッションがし易い環境作りの役が大学側に必要である。		
講座の位置づけ 既存講座との関係	教養教育科目として他の科目とは独立した位置づけである。そのため、1～4年生が受講する可能性がある。内容からは若干のITに関する予備知識があることが望まれるが、教養教育科目であるために履修条件を設けにくい。		
履修前提条件	1年生も受講できる教養教育科目であるため、条件は設定していない。		

授業準備と実施の体制	事前の資料公開、講義終了後のアンケート集計に授業支援システム（Web 上で利用可能）を活用している。授業実施においては、担当教員が冒頭で講師紹介、終了前に質疑応答の場を設け、講師との対話が進むよう誘導している。TA1 名が授業運用を補助している。
成績評価の方法	出席回数、授業後のアンケートでの成績に関わる設問、最終回でのレポートについて、加重平均。

講座の構成（シラバス）	単元と時間配分（1コマ 90 分で実施）	演習・実習	実施担当・役割分担
	ガイダンス		協会、大学
	SE とは		協会
	SE のマネジメントスキル		協会
	情報システムの企画と提案		協会
	システム設計の概要		協会
	システムテストと運用テストの意義		協会
	★情報サービス産業界の現状		協会
	データベースの知識		協会
	ネットワークの知識		協会
	情報セキュリティと個人情報保護		協会
	プロジェクトマネジメント		協会
	SE のベーススキルと関連知識		協会
	☆システム化事例紹介		協会
	授業全般の総括とまとめ		協会
レポート作成		大学	

演習・実習の内容 必要なマシン環境 等	協会所定のアンケートを大人数の受講生に対して効率よく実施できる IT による授業支援システム。このシステムは、以下の管理機能を有する。 アンケートの内容は、講師や講義内容に関する数値的評価、授業内容や要望についての記述式回答を求めるもの、及び出授業中に公開したパスワードによる出席管理機能。 さらに、授業終了前に簡単な課題を課して、記入後回収している。
---------------------------	---

2. 講座実施後の情報

受講者の感想(本講座で得られたもの)	<p>「この講義を受ける前は、SE はただひたすら難しいシステムを作っているのだと思っていた。しかし、実際は企業などの客から必要なシステムを聞き取り、更になぜこのシステムが必要なのかといったかなり踏み込んで客とのやり取りが必要な職業なのだと分かった。また、相手となる企業は必ずしも IT 業界ではなく、教育分野・交通機関・スポーツにいたるまで多岐に渡っている。SE は IT 業界が詳しいだけでは務まらず、相手企業の業界や業務内容まで把握して置かなければならない。そして、SE 同士グループ内で作業をする場合、メンバー間のコミュニケーションが欠かせない。一人がミスをしてしまった場合、メンバー間のやり取りができていなければ、グループとしてのシステムに異常が出てしまい、かえって非効率となってしまう。SE は人とのコミュニケーションを大切にし、IT 業界を問わず様々なことを積極的に吸収できる人に向いている職業だと思う。」(代表的な回答例)</p>
先生の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際に経営者（やそれに近い方）が講師をされており、会社経営や実社会で我々にも馴染みのあるシステムについての開発に関わるエピソードなど伺え、それがリアリティ、緊迫感となり、講義内容に厚みをもたらしている。 ・ オムニバス形式であり講師は交代するが、システム構築対象についての十分な理解、クライアント担当者とのコミュニケーションが重要であることへの強調が共通しており、受講者にもそれが一貫した事項として伝わっている。 ・ 受講生の構成としては、理工学部(工学部) 64%、経営学部 26%、経済学部 6%、教育人間科学部 4%であった。受講生の学年は1年生が23%、2年生25%、3年生36%、4年生16%であった。協会が用意されている講義内容は若干予備知識不足かもしれないが、全学対象ということで教養教育科目の位置づけ、さらに教養科目であるために1～4年生を受講対象とせざるを得なかった。
企業・団体による評価	<p>70名ほどの学生にIT業界について知って貰える場を頂けたことは意義がある。学生の授業態度も前向きに取り組む姿勢が感じられて好感が持てた。</p> <p>課題及び改善点としては受講対象となる学生が1年生から4年生と多様であり、講師の講義内容も入門書的な所に重きを置く内容にならざるを得ないところがあり、より専門的な内容を期待している学生には物足りなさを感じさせてしまう所が上げられる。</p>

今後の展望 (継続に向けた課題)	開講時刻が一般の教養科目の時間帯であり、同時刻に開講される他の講義との競合により受講希望者は増減する。昨年と開講時間は同一であるが、受講者数の減少があった。原因として考えられることは、授業内でのアンケートや授業時間外の LMS を利用したアンケートの取り方が複雑で、受講者に混乱を生じさせたようである。来期に向けて検討を進める。
---------------------	--

3. 支援企業・団体からの情報(神情協記入)

提供教材・コンテンツ情報	講座名称: 大学向けSE講座 講義形式: SE講座講師が独自に作成した教材を元にPPTで講義を行う。		
提供元	神奈川県情報サービス産業協会 (会員企業の認定講師)	費用 (標準価格)	①講座費用(別途調整) ②テキスト有償(SEハンドブック)
支援の目的・目標	SEの業務について講師の経験を踏まえて解説し、仕事内容に理解を深め、さらに講師自身の経験に基づく業界の話により、業界の現状と業界が求める人物像を受講生に伝える。 理系・文系さらには男女を問わず、IT業界を進路選択の一つとして考察いただき、受講生の多くがIT業界に進路を選択をする事を目標とする。		
具体的な支援内容または提供教材の内容	講義は、協会で編纂した手引き書(SEハンドブック)を元に、担当講師が独自に作成した教材を使用し講義を行う。 注記: SEハンドブックの詳細は別紙添付。		
講座実施における企業・団体の役割	下記の 14 回の講座を団体が提供し、各回の講師は会員企業より認定されたSE講座講師が実施する。 講義 : 01(ガイダンス) 講義 : 02(SEとは) 講義 : 03(SEのマネジメントスキル) 講義 : 04(情報システムの企画と提案) 講義 : 05(システム設計の概要) 講義 : 06(システムテストと運用テストの意義) 講義 : 07(情報サービス産業界の現状) 講義 : 08(データベースの知識) 講義 : 09(ネットワークの知識) 講義 : 10(情報セキュリティと個人情報保護) 講義 : 11(プロジェクトマネジメント) 講義 : 12(SEのベーススキルと関連知識) 講義 : 13(特別講義、システム化事例紹介) 講義 : 14(授業全般の総括とまとめ)		
企業・団体からの推薦コメント	神情協会員企業の中からSE講座講師審査会で資格認定された講師が各回の講義を行う。 講義は、毎回違う講師(企業)がご自身の経験や実績を踏まえて講義を行うため13名(複数企業)の講師の講義を受ける事となる。 講師企業には、メーカー系、ユーザー系、独立系等の企業があり、企業規模も大企業から、中小企業さらにはベンチャー企業まで幅広い講師(企業)が担当することとなり、受講生にIT業界の多くの可能性を紹介する。 この授業には利用者側の教員も参加頂き、教育に積極的に関与して頂く。		